

2022 年度入試結果総評

—大分県—

今年度の大分県公立高校入試において、推薦入試の合格内定者を除く一次入試の実志願者数は、全日制 6,181 名で昨年度より 111 名増となりました。大分全県の募集人員が 5,889 名であったため、志願倍率は約 1.05 倍と昨年度と比較し倍率はほぼ変わりませんでした。毎年受験者の増減があるため、各高校の定員や複数の高校の統合など受験環境の変化を把握し、最新の情報を常に収集する必要があるといえます。また平成 27 年度から入試の実施要領に大きな変化があり、変更 7 年目の昨年度は平均点が 157.5 点 (52.5%) となり難易度が下がりました。今年度は英語の平均点が大きく上がり 158.4 点 (52.8%) という結果になっています。大分独自の傾向と対策等、今後の勉強の仕方に大きな影響はありませんが、思考力や表現力を問う難易度の高い入試になりますので、早期の対策が必要です。

まず大分地区の主要高校の倍率ですが、上野丘高は令和 3 年度入試の 1.33 倍から 1.12 倍。また、文武両道の舞鶴高普通科は、理数科とのくくり募集で 1.41 倍、中高一貫の豊府高は昨年 1.62 倍から 1.52 倍となっています。さらに総合学科の大分西高 1.42 倍、雄城台高 1.47 倍、鶴崎高 1.26 倍と続いています。大分市内の進学校が軒並み倍率を上げ、高校によっては難易度の高い入試となっています。平成 20 年度導入の「大分全県 1 区」開始から 14 年が経過し、倍率が大分市内への生徒流入などでここ数年大きく変動しています。例年倍率が高い舞鶴・豊府・大分西・雄城台のような人気校で、全ての高校の倍率が左右されるため、今後も進路決定に関しては注意が必要です。

各公立高校の大学合格実績は、上野丘高が超難関の東京大学に 18 名 (前年 12 名)、大阪大学に 18 名 (前年 15 名) 合格、国公立大学医学部に 29 名 (前年 28 名) 合格、さらに九州大学に 66 名、京都大学 5 名、広島大学 17 名、筑波大学 3 名など、上野丘高での順位 100 位以内を指標にすることで難関大に合格できるという信頼をキープしており、大分県内随一の合格実績を持つ進学校としての位置を今年も確かなものにしていきます。その他、舞鶴高は京都大学 3 名、大阪大学 4 名、九州大学 23 名、お茶の水女子大学 1 名、神戸大学 1 名、広島大学 6 名、国公立大医学部 5 名合格など、また豊府高は、大阪大学 3 名、九州大学 7 名、筑波大学 2 名、広島大学 8 名、国公立大医学部 6 名などの結果を出しています。

大分県内で最も受験者数が多い私立大分東明高の一般入試は、今年度も受験者約 2,900 名の大型入試となりました。入試問題も公立入試の指標となる問題を作成するなど、来年度も引き続き受験者は多数になることが予想されます。また、特奨クラスは授業料減免や割引等の特典があるため、根強い人気を保っています。しかし、特奨生入試は約 2,900 名の受験者のうち上位 312 名 (奨学生としては約 200 名) 程度しか合格できないため、上野丘高と同等以上の学力レベルが必要になります。加えて、特奨試験 (1 月中旬実施) においては、出題内容の難易度が高いため十分な受験対策が必要です。また今年度も大分高の一般試験は約 800 名受験し、私立高校受験の選択肢も増えています。例年私立高校の受験は、得点が公開されるため、公立入試直前での最後の進路決定の大きな指標になります。私立の結果次第で公立の受験校が決定するケースも多く、重要な試験となります。